



春は始まりの季節。海外ボランティアへの参加…いつかやってみたくて思っていた方へ。JICA ボランティアは種まきをするようなもの。一人ひとりの活動がいつかその地域に根ざしていきます。今、種まき中のボランティアはどんな活動をしているのでしょうか…。

藪下 美貴さん (ヨルダン/青少年活動)

ヨルダンのパレスチナ難民キャンプの幼稚園で、音楽と図工を子ども達や先生方に教える活動を始めて、3か月が経ちました。幼稚園といっても、教室には遊び道具が1つもなく、まさに「授業」を受けるために子ども達はやってくるので、まるで学校のような。踊ることが好きで、元気いっぱいの子供達です。1度私の名前を覚えると、「みーき、みーき」と何度も頭の上で、手をたたいたり、何回も握手を求めたり、と教室内を通るだけでも大変なことがあります。そこで、私はこの有り余るエネルギーをなんとか音楽や図工に使ってもらい、子ども達の「表現する力」を伸ばしたいと考えています。

セリーヌ・ディオン之歌、やまびこさん、ひげじいさんをリクエストし、盛り上がることの大好きな愉快で人情深い同僚。毎日「元気している？ここにきたことうれしく思っている？」と肩やほっぺをよせながら、聞いて下さる優しい校長先生。寒い時は、必ずストーブのそばに呼んでくれる教頭先生やそうじの先生。家族のように接してもらいながら、活動しています。図工も音楽も1からのスタートではありますが、子ども達のために体当たりで取り組みたいと思っています。



子どもたちにハサミの使い方を教える藪下さん

4月8日から5月23日までJICAボランティアの応募期間です。期間中は北陸各地で説明会を行います。興味のある方はHPをご覧くださいか、もしくはJICA北陸までお問合せください。

詳しくは [JICA北陸ホームページ](#) [事業の紹介](#) [海外ボランティア](#) [青年海外協力隊](#)

Check!

教師海外研修 in タンザニア

アフリカの大地で出会った感動を日本の子どもたちへ

United Republic
of Tanzania



2007年夏にJICAの教師海外研修でタンザニアを訪れた先生方が、帰国後にその経験を活かして国際理解授業を実践されました。今回はその中から、高岡市立戸出東部小学校の龍澤英之先生が3年生の子どもたちに行なった授業の様子を紹介します。

授業はいきなり先生が子どもたちの前に大きな布を広げるところからスタート！「なんだろう？」と身を乗り出す子どもたち。「これはタンザニアの人が身に付けているカンガっていう布なんですよ。巻いてみたい人いる？」先生がそう言ったとたん、「ハイ！ハイ！ハイ！」。でも試着するときはみんなちょっと恥ずかしそう。



タンザニア人に見える？

子どもたちの気持ちがタンザニアに一步近づいたところで先生が切り出します。「今日はね、タンザニアの学校を見ていこうと思います。みんな、タンザニアの学校ってどんなだと思う？」すると子どもたちは、「ぼろいと思う。」「僕もそう思う。パンチしたらすぐに崩れるんだらうな。」「子どもの人数が少なそう。」との予想。では実際はどうなのでしょう？

先生がみんなに学校の様子を伝える写真を配ります。さあ、グループに分かれて写真とのにらめっこ開始！気がついたことをなんでも付箋紙に書いていきます。そこには、「ぼろいけど、そんなに簡単に壊れそうじゃない」「1つの机に4人も座ってる」「教室の中が暗い」「子どもの人数は多いな。」「授業、楽しそう。」「みんな笑ってる。」…などなど。みんなたくさんの方に気が付いたね。最初に予想したタンザニアの学校とは違ってたかな？

写真の次はビデオが登場！そこには、先生方を歓迎して歌や踊りを披露する子どもたちや、お返しにラジオ体操や『ふるさと』の合唱を贈る先生方の姿が映っていました。自分たちと同じ年代の子どもたちが自分たちを同じように学校で学んでいる。そして僕たちの先生がそこで一緒に楽しんでいる。そんな様子をみんな吸い込まれるように見ていました。

「踊り、楽しそうだったなあ。僕も踊りたくなった。」「タンザニアのみんなが歌った歌は、きっと日本でいう『ふるさと』の歌と同じなんじゃないかな。ありがとうという気持ちで歌っているようだったな。」「タンザニアの人って、やさしそうだな。」「みんな助け合って頑張っているんだな。」「いつかタンザニアに行行って会いたいな。」と子どもたち。タンザニアをなんて自然に受け入れているんでしょう。「タンザニアの子どもたちも、みんな私たちと同じ地球に生きる人間であることを感じてほしい。」という先生の思いがしっかり届いたようです。これからもそんな気持ちを忘れないで下さいね。日本とタンザニアの子どもたちが龍澤先生を通して手を繋いだような、心温まる授業でした。

タンザニアのみんなも頑張っているんだな



北陸発! 学校給食支援プロジェクト in ケニア

Republic
of Kenya



～草の根レベルの人と人との絆を大切にしたい協力関係に期待するものとは～

皆さんは、アフリカはケニア西部にあるナンディー県テリック郡で学校給食支援活動を展開している北陸アフリカ協会をご存知でしょうか。今回は、給食システム立ち上げの第一線で活躍する荒木潔さんにお話しを伺いました。

JICA) なぜ、ケニアへの協力活動に参加されたのですか。

荒木さん 私は、1995年12月より2年間、青年海外協力隊員（職種：システムエンジニア）として、ケニアのナクルにある技術専門学校にてコンピュータを教えていました。帰国後も、ケニアで得た経験を生かして協力活動が続けたい、良好な関係を草の根レベルで広げていきたいと思いつき活動場所を探していました。そんな時、ここ北陸でケニアへの支援に取組む北陸アフリカ協会のことを知り、参加させていただきました。



荒木さんと現地の子どもたち

JICA) これまで取り組んできた活動について教えてください。

荒木さん 2006年に6ヶ月間、2007年には3ヶ月間、北陸アフリカ協会のプロジェクト対象地域であるテリック郡に飛びました。初めてケニアの首都ナイロビを訪れてから10年、まず実感したことは、首都ナイロビの急激な発展でした。しかし、山村部であるテリック郡に暮らす人々の生活は10年前と何ら変わっていないような印象を受けました。テリックの住民と衣食住を共にする中、2つの小学校で幼稚園を併設した給食用の簡易調理場の建設に携わりました。今後も更に複数の小学校で建設を続ける予定となっており、ひとりでも多くの子どもが給食を食べ勉強に集中することができればと思っています。

JICA) 今後の事業の展開と課題についてどのようにお考えでしょうか。

荒木さん 地域社会による解決が望まれる課題について、テリックに暮らす住民に、自分たちで解決に取り組むといった姿勢が生まれて欲しいです。そして私達が後から着いて行く形が理想的なのではないかと思っています。このような関係が構築され協力活動ができるようテリックの住民との関係づくりに時間をかけて取り組んで行きたいです。



完成した簡易調理場

JICA) プロジェクトを作るにあたり、具体的にどのような難しさがあるのですか。

荒木さん 以前、学校給食に必要な食糧の充足率が継続的に向上するようプロジェクトを計画しました。テリックでは学校給食用の食糧は児童の親からの寄付を主として成り立っています。そのため、余裕のある児童の親からは多めの食糧の提供、余裕のない親からは調理補助・農園づくりなどの労務の提供といった、住民ひとりひとりの実情に即した形で貢献が可能となり、地域内に偏在する食糧、労働力等に対して個々の感じる負担が平等になるようプロジェクトを設計しました。このプロジェクトに必要な不可欠であったものは住民の自主性・自発性でした。しかし、活動の見返りとしてお金への期待が生じるようになりました。プロジェクトの再設計等、色々と検討しましたが、しばらくの間、様子を見ることにしました。

JICA) さて、ケニアと言えば、昨年12月に実施された大統領選挙結果に対する抗議行動に伴う治安の悪化が懸念されますが、活動の実施に影響あるのではないのでしょうか。

荒木さん 現在、活動を見合わせています。今後の活動の再開に関しては、現在の治安悪化の終息を待ち、慎重に安全状況を確認しつつ、安全第一で判断したいと考えています。

JICA) 今後の更なるご活躍を期待しております。ありがとうございました。



学校の子どもたち

※ 北陸アフリカ協会

アフリカのエイズ孤児の支援を主な目的とする。主な事業は、①アフリカのエイズ孤児に対する教育面での支援、②ケニアと金沢のこどもたちの交流支援、③アフリカンフェスティバルの開催、である。2006年、2007年とJICA北陸にあるテレビ会議システムを使い、ケニアと金沢の小学生の交流事業（JICA市民参加協力事業海外プログラム）を展開した。